教育実践研究　第33集（2023）127－132

［体育・保健体育］

体育授業におけるゴールボールの実践が生徒に与える効果に関する検討

－運動を「行う」「見る」「支える」「知る」関わりに着目して－

吉田　直樹*

1　緒言

現勤務校において，運動やスポーツをすることは好きですかという問いに対し，否定的な回答をした生徒に理由を聞くと，「運動ができないから」と答えた。この返答から，生徒の中では技能の良し悪しによって運動が楽しめるかが決まるのだと実感した。実際に，伊藤・波多野[1)]は，運動を嫌ったり体育授業を嫌ったりする否定的態度の生起には，運動能力の低位に対する劣等感の影響があると述べている。つまり，運動ができるかという運動を「行う」ことが重視されていることがわかる。加えて，日野ら[8)]は子どもが評価する「よい体育授業」を実現するためには，マネジメント場面の時間を少なくし，学習成果の算出に意味をもつ運動学習場面の時間をできるだけ多く確保することが大切だと述べている。このことから体育授業においても運動を「行う」時間が重視されているのである。

しかしながら，中学校学習指導要領解説保健体育編[10)]には，体育における見方・考え方について，「運動やスポーツを，その価値や特性に注目して，楽しさと喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え，自己の適正等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかかわり方と関連付けること」と示されている。また，大越[3)]は，運動やスポーツを「する」ことはもとより，「みる，支える，知る」などの運動やスポーツとの多様な関わり方を，生涯を通じて実践できるようにすることは，生きがいを持ち健康で活力ある生活を送る上で大きな意義があると述べている。つまり，現代の体育授業では，運動を「する」「みる」「支える」「知る」という多様な関わりの中で運動を楽しみ，生涯を通じた実践力を育むことが求められているのである。

そのような状況の中で，2021年に我が国で開催されたパラリンピックの競技であるゴールボールという教材に素晴らしい価値があるのではないかと筆者は着目した。木村[4)]は，ゴールボールについて「見えない」という不自由さが授業の中心に位置し，「見えない」からこそ，味方のプレーへの応援，指示，味方の守備位置を感じるなどコミュニケーションが多岐にわたり多く見られたと報告している。つまり，ゴールボールの「見えない」という競技特性が運動を行うだけでなく，「見る」「支える」「知る」関わりにつながることが示唆されている。また，ゴールボールを教材として扱った先行研究をみると，ゲーム中心の短時間の授業実践が多い。江藤・三田[2)]は，２時間のゴールボールの授業実践を通してゲーム中心となり練習機会が少ないため，技能の習得とはならなかったことを課題としている。そこで，基礎技能習得を含めたゴールボールの段階的な授業実践を行うことで，生徒が多様な関わりの中で競技に親しみ，他の競技では得られなかった学びがあるのではないかと考えた。

2　研究の目的

本研究では，アダプテッドスポーツであるゴールボールの全７時間の段階的な授業実践を通して，生徒の学びの変容や運動従事時間の観察を行うことで，ゴールボールの授業実践が生徒に与える効果を明らかにすることを目的とする。

3　研究の方法

(1) **期間**：令和４年６月６日～６月24日

(2) **対象**：Ｎ県Ｋ市立Ｓ中学校　１～３年生　45名　（男子20名，女子25名）

*加茂市立須田中学校

表１　学習従事観察法の観察カテゴリーと行動例（福ヶ迫ら[9]）

カテゴリー		定義	行動例
学習従事	直接的運動従事	運動学習に直接従事している（運動を行うこと）	・体全体を使ってボールを止めている。 ・ゴールを狙ってボールを投げている。 ・ゲーム中に空いたスペースを埋めようと移動する。
	間接的運動従事	運動学習に間接的に従事している（運動をみること）	・パスやシュートに関与せず，順番を待っている。 ・ゲーム中に直接攻防には関与せず，ボールの行方を追っている。
	支援的従事	運動以外の支援的な役割行動に従事している（運動を支えること）	・運動する人を補助している。 ・ゲームの審判やタイマーなどの役割を果たしている。
	認知的従事	運動に関連して考えたり，工夫したり，教えあったりしている（運動を知ること）	・チームメイトと作戦を考えている。 ・ゲームを反省し，学習カードに記入している。
学習非従事	学習外従事	移動，待機，活動と活動の合間など，学習以外の活動に従事している	・コートチェンジなどの移動をしている。 ・運動内容の説明などを聞いている。
	オフタスク	課題から離れた行動を行っている	・友だちとふざけ合ったり，無駄話をしている。 ・手いたずらをしている。

(3) 検証方法

①　学習従事観察法

毎時間，ビデオ撮影を行い，学習従事観察法において，授業実践における生徒の運動への従事時間を観察する。福ヶ迫ら[9]の研究をもとに，生徒の活動を「学習従事」「非学習従事」の２つに大別し，「学習従事」は，さらに「直接的運動従事」「間接的運動従事」「支援的従事」「認知的従事」の４つに下位カテゴリーに区分する（表１）。集団時間標本法を用いて，体育授業中の運動学習場面を12秒インターバルで観察・記録を繰り返し，それぞれの活動人数を記録する。具体的には，ゴールボールの試合を行っている際，体を動かして攻防をしている場合は直接的運動従事，順番を待ちクラスメイトの動きを見ている場合は間接的運動従事，仲間へのアドバイスやサポートをしている場合は支援的従事，チームメイトと作戦や試合の反省について話している場合は認知的従事としてカウントする。このように，生徒の運動への従事時間を客観的に記録する。

②　形成的授業評価

高橋ら[5]の形成的授業評価を毎時間，授業終了後に実施する。「成果」「学び方」「関心意欲」「協力」の４観点について「できた（３点）」「どちらでもない（２点）」「できなかった（１点）」を自己評価する。長谷川ら[7]の診断基準によって授業を評価することで，ゴールボールの授業実践における成果や学習課題が生徒の学びにどのような効果があったかを明らかにする。

③　個別ワークシート

毎時間，振り返りを行い，生徒の学びの蓄積を行う。振り返りの記述による生徒の気づきや感想から，ゴールボールの授業実践を通して，生徒にどのような効果があったのかを明らかにする。

4　授業計画

(1) 単元の目標

①　運動の多様な関わりを理解し，ゴールボールにおいて役割に応じた動きで空いた場所をめぐる攻防を行うことができる。【知識・技能】

②　自己やチームの課題を発見し，その解決のための取り組み方をチームとして工夫するとともに，自分の考えをチームに伝え，改善しようとする。【思考・判断・表現】

③　主体的にゴールボールに取り組むとともに，作戦などの話し合いに貢献しようとし，互いに支え合おうとする。【主体的に学習に取り組む態度】

(2) 単元計画

	ねらい	活動内容
第１次 （１，２時間目）	○基礎的な知識・技能を習得する ・ゴールボールの競技特性を理解する ・狙った場所にボールを転がすことができる ・ボールを止めることができる	・２人１組でボールを止める，転がす ・PK戦（サポーターなし）
第２次 （３，４時間目）	○多様な関わりの重要性を理解する ・サポーターの重要性を理解する ・サポーターの動きを考える	・PK戦（サポーターあり） ・２対２のミニゲーム
第３次 （５～７時間目）	○役割に応じた動きを考える ・サポーターも含めたフォーメーションを考える ・チームメイトの長所を踏まえた作戦を考える	・チーム練習 ・３対３のゲーム ・リーグ戦

5　授業の実際

(1) 基礎的な知識・技能を習得する（第１次）

パラリンピックの映像を見ることで，ゴールボールの競技特性について学習した。生徒らは，ゴールボールには，視覚以外の五感，特に鈴の音を聞き分ける聴覚が重要であることに気づいた。実際にアイマスクを着用し，２人１組でボールを転がす，止める活動を行い，ボールを止めるには，鈴の音を聞き分け，素早くのその場に移動し身体を大きく使って止めることが大切であることを学んでいた。一方で，ボールを狙ったところへ転がすことの難しさを感じる生徒が多くいた。さらに，ボールを止める際にも見えないことによる恐怖心から，思いっきり身体を動かすことを躊躇い，転がってくる場所がわかっても止めることができないなどを感じていた。

(2) 多様な関わりの重要性を理解する（第２次）

上述の生徒の困り感をもとに，サポーターにどんな情報を教えて欲しいのか，ミニゲームの中で支える動きについて考える活動を行った。必要な動きとして，特に状況を把握できるように声かけを行うことの必要性に気づき，作戦会議を繰り返す中で，得点が入ったか入っていないのか，仲間がどんな動きをしていてどこにいるのか，相手はどこから投げるのか，自分の向いている方向が合っているかなどに関するサポーターの声かけが増えていった。このことにより，アイマスクをしていても，状況の把握ができるようになり，思いっきり身体を動かして止めることができたり，空いたスペースを狙った攻撃ができたりと，恐怖心がなくなり，運動を「行う」だけでなく，「みる」「支える」「知る」などの関わりの中で運動を楽しんでいた。

(3) 役割に応じた動きを考える（第３次）

パラリンピックと類似したルール（図１）を独自に作成し，リーグ戦を行った。作戦ボード（図２）を活用してフォーメーションを考え，１人が前に出て三角形を作るフォーメーションや一直線のフォーメーションなど相手チームの動きやチームメイトの長所を考え，それぞれの役割で最大限のパフォーマンスが出せる形を探っていた。さらに，「10セカンズ」という反則があることで，規定時間内に攻撃が完了するようにサポーターの動き方やフォーメーションなども話し合う様子が見られ，試合に出ていないサポーターも全員参加で試合に関わっていた。また，全員参加により，得点が決まった時や試合に勝った時には自然と讃える様子やチーム全員で喜ぶ様子があった。

～類似ルール～

・試合は２分間で、人数は３人対３人で行う
・チームで試合に出ない選手は、サポーターとなる。
・試合のないチームは、審判・実況を行う。
・攻撃側がボールを投げて（審判のホイッスル）から守備者が保持するまでは話さない。
・審判の判定は、絶対である。

○主な反則

・ハイボール・・・・高いバウンドのボールを投げる
・アイシェード・・・審判の許可なく故意にアイマスク・タオルを外すこと
・ノイズ・・・・・・攻撃側チームが守備側チームに不利になるような音を故意に出すこと
・１０セカンズ・・・守備側の選手がボールを止めてから１５秒以内に投げ返さないこと

図１　類似ルール

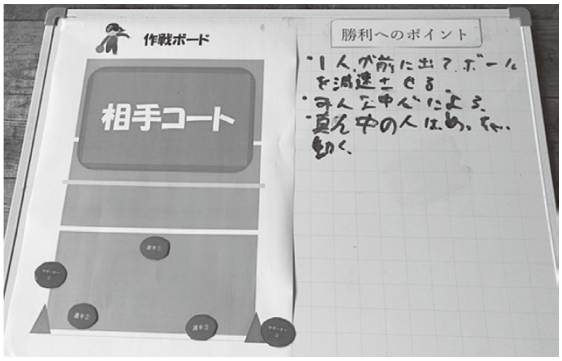

図２　作戦ボード

6　分析と考察

(1) 学習従事観察法によるゴールボールの授業分析

全７回のゴールボールの授業実践における各授業場面の時間量の割合は図３の通りである。

運動を実際に「行う」直接的運動従事の時間は全体の28％～29％程度となり，全７回で横ばい傾向であった。つまり，今回の授業実践は，生徒の運動を行う時間は一定であったことがわかった。

運動を「みる」間接的運動従事の時間は，１時間目では9.4％，２時間目では16.7％，その後授業を重ねるごとに減少傾向を示し，７時間目では12.6％まで減少した。一方で，運動を「支える」という関わりである支援的従事の時間は，１時間目では13.8％，２時間目では10.2％，その後授業を重ねるごとに増加傾向を示し７時間目では，17.7％まで増加した。１時間目では，ブラインドウォークなど「見えない」という状況を２人１組で体験する活動を多く取り入れたため，意図的に支える関わりが多くなったことが推察される。２時間目以降に関しては，授業を重ねるごとに，体験をもとに「どんな声かけをされるとプレーしやすくなるのか」を生徒が考えることで，運動している仲間をただ見ている時間が減少していき，ボールの位置を教えたり，試合の状況を細かく伝えたりなど自発的に支える関わりが増えていった。このことから，ゴールボールの競技特性により，運動を「見る」時間が減少し，「支える」時間が増加したものと推察される。

運動を「知る」認知的従事の時間は，１時間目は7.5％，２～４時間目では16％程度で一定を示し，５～７時間目では19％程度に増加した。１時間目では，体験的な活動がメインとなり，話し合う活動時間が顕著に少なくなった。２時間目以降では，「見えない」という状況の中で，どんなサポートが必要か話し合うことで，ペアやチームで知識を深めていった。授業展開の第３次にあたる５時間目以降では，フォーメーションやサポートの動きをチームで考えることで話し合い活動が活発に行われた。これらのことから，「見えない」というゴールボールの競技特性から試合での状況が運動をしている生徒には把握ができないため，サポーターが客観的な視点で話すなど，全員参加で話し合い活動が行われ，活発な活動となっていたと推察される。

これらのことから，ゴールボールの「見えない」という競技特性により，運動をしている仲間に声をかけるなどの「支える」関わりや運動をしている生徒が把握できない状況を，周りが客観的な視点で話し，全員参加で話し合うなどの「知る」関わりの時間が増加するものと考えられた。

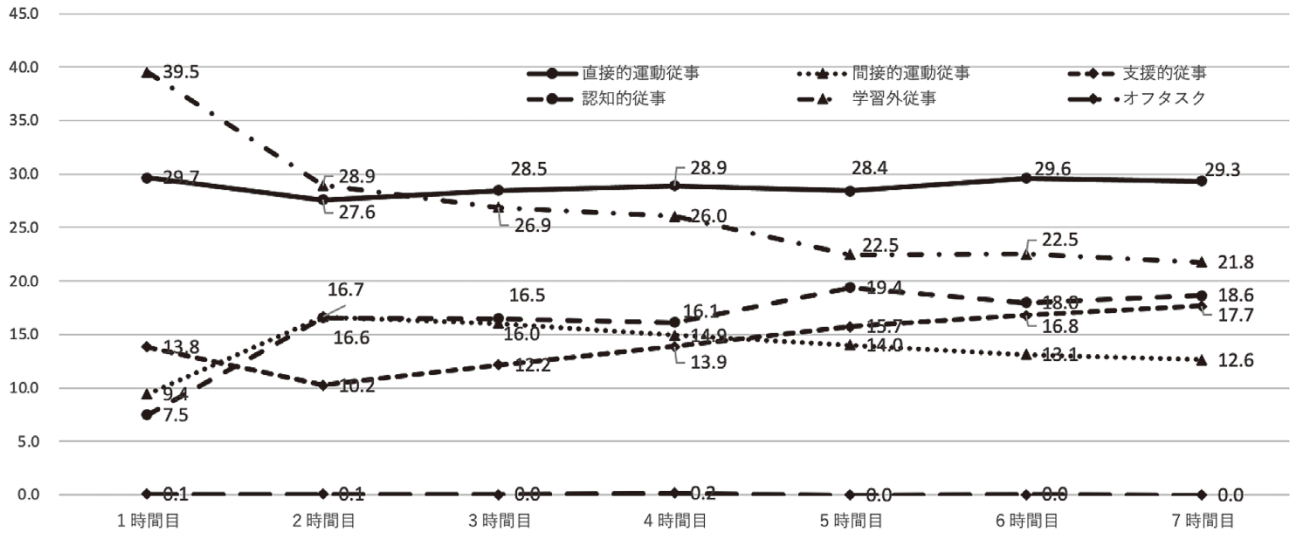

図３　各授業場面の時間量

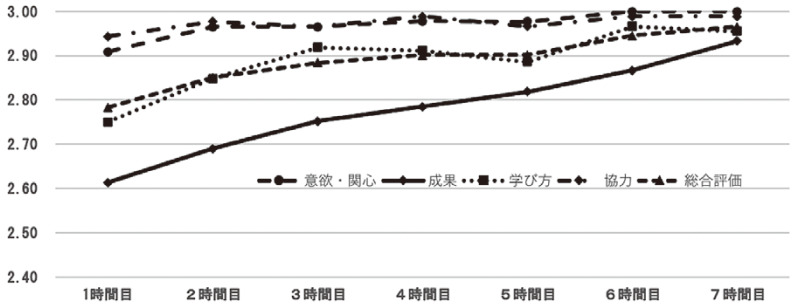

図４　形成的授業評価の結果

表２　長谷川ら[7]の診断基準による評定結果

授業時間	1	2	3	4	5	6	7
意欲・関心	4	5	5	5	5	5	5
成果	4	5	5	5	5	5	5
学び方	5	5	5	5	5	5	5
協力	5	5	5	5	5	5	5
総合評価	5	5	5	5	5	5	5

(2) 形成的授業評価から生徒の学びの変容

全７回のゴールボールの授業実践における形成的授業評価の結果は図４の通りである。

「総合評価」の次元では，７回の授業全てで向上傾向を示した。長谷川ら[7]の「ボール運動を対象とした診断基準」に照らし合わせると評定は全て５を示し，高い評価となった（表２）。髙橋[6]は「授業を直接受けた子どもたちから高く評価された授業を『よい体育授業』である」と述べている。さらに長谷川ら[7]は，よい体育授業を評定４以上であることを報告している。このことから，今回のゴールボールの授業実践が生徒にとって学びが多く，よい体育授業であったことが示された。高橋ら[5]は，「『意欲・関心』の因子が子供の求める授業の基礎的な条件であり，この条件の充足の上に，『成果』因子や『協力』の因子が満たされたとき，子どもの眼から見た『優れた授業』が実現される」と言及している。つまり，生徒にとって今回の授業実践が意欲・関心が高いものであり，その上に，仲間と協力する中で成果を感じる内容だったのだと推察される。

各次元の結果をもとにどのような活動が生徒に効果を与えたのか見ていくと「意欲・関心」の次元では，評定は，１時間目のみ４を示し，それ以降は５という結果であった。岩田[6]は，「教材・教具が適切でなければ，子どもたちの学習意欲は高まらず，学習活動は停滞してしまう」と指摘している。つまり，今回のゴールボールという教材が生徒にとって適していたために，高い値で推移したことが考えられた。生徒の個別のワークシートの記述を見てみると，「バスケは身長差で決まるスポーツで悩むことが多かったけどゴールボールは身長関係なくできるスポーツで楽しかった」「スポーツの得意不得意に左右されないところが面白かった」「みんなに出番があったから楽しかった」などの記述が見られた。このことからゴールボールという教材は，生徒にとって運動の技能差が少ないことに加えて，サポーターなどの役割の中でみんなが活躍する機会があることで，運動の得意不得意にとらわれずに楽しむことができ，意欲的な活動に繋がったのだと考えられる。

「成果」の次元では，評定は，１時間目のみ４を示し，それ以降は５という結果であった。個別のワークシートを見ると，１時間目では，「どこにくるかわからないので止めることが難しかった」「目が見えないと向きがわからないので難しかった」などの「見えない」という状況に難しさや恐怖心を感じ，思いっきり動けない現状があった。しかし，授業を重ねるごとに「かなり反応できるようになった」「耳をすまして準備することで怖さが減った」など個々の技能の高まりを感じ，仲間との関わりが増えた後半では，「仲間から声かけがあるとわかりやすかった」「フォーメーションを考えるとチームの強さが一気に変わってよかった」などの記述が見られ，仲間との関わりの中で，学習成果を感じていた。このことから，音を聞く力などの基本的な技能の高まりとともに，どのようなサポートをすると良いのかなど，支える関わりでの思考を通して，達成感を味わい，生徒たちは成果を感じていたのだと考えられる。

「協力」の次元では，評定は，７回の授業全てで５を示し，高い値で推移した。個別のワークシートを見ると，「ペアの人と協力できないと事故につながってしまう」という記述があった。「見えない」という状況により，「支える」ことの重要性を感じ，全てで高い値になったと推察される。実際に生徒の記述では「ペアと協力して助け合えました」「みんなで声かけができた」「指示の出し方を工夫したい」など仲間との協力に関する記述が多く見られた。このことから，ゴールボールの競技特性が，支えることの重要性に気づかせ，自然と仲間と協力する活動に繋がったと考えられる。

以上のように，ゴールボールの授業実践によって，生徒が「支える」関わりの重要性に気づき，意欲的な活動につながることがわかった。今回の授業展開の工夫によって個々の技能の高まりだけでなく，仲間との声かけなどの協力によって，授業を重ねるごとに成果を感じることができたのだと考えられる。

(3) 個別ワークシートにおける授業を通しての振り返り

単元を通しての感想として，生徒に「他の種目との違いはどんなところがあったか？」と問いかけた。数名の生徒の記述を以下に示す。

S1：アイマスクをつけることで，みんなが同じ状況なので協力がすごく必要だと思いました。
S2：目が見えなくて思うところに行けないからこそ，仲間を信じて取ってね！と信頼するところだと思いました。
S3：サッカーやバスケでは，自分で考えてプレーできるけど，ゴールボールは自分で情報を目で確認することができない。しかし，サポートをする人との協力でプレーができる。この協力する楽しさがゴールボールにはあると思いました。
S4：ゴールボールは，投げ方やフォーメーションを工夫することで男子とかでも一緒に戦うことができてよかった。
S5：バスケは身長の差で決まったりして悩むことが多かったけど，ゴールボールは身長に関係なくできるスポーツで楽しかった。

S1，S2，の記述から，「見えない」という競技特性により，他の競技と比べて協力することの重要性を感じていることがわかった。また，S3の記述から，サポーターとの協力による楽しさを感じていることがわかった。このことからゴールボールという教材は，仲間と協力することの重要性や楽しさを感じることができる教材であることがわかった。また，S4，S5の記述から，ゴールボールという競技が男女などの技能の差や体格による技能の差を少なくし，技能差で悩む生徒にも楽しめる教材であることが推察される。

これらのことから，ゴールボールは，技能差で悩む生徒も楽しめる教材であり，また，「見えない」という競技特性によって生徒たちが仲間との協力の重要性や楽しさを感じることがわかった。

7　まとめ

本研究では，全７時間のゴールボールの授業実践が生徒に与える効果を明らかにすることを目指して行った。その結果，運動を「支える」関わりや「知る」関わりの時間が増加し，個々の技能の高まりだけでなく，支える関わりを軸にした仲間との声かけなどの協力によって，授業を重ねるごとに運動を「行う」だけでなく，「支える」「知る」などの多様な関わりの中で運動の楽しさを感じることがわかった。今後，他の学校の生徒でも同様の結果が得られるのか，検証していきたい。

8　参考・引用文献

1）伊藤精男・波多野義郎（1982）「体育授業ぎらい」の生起に関する因果推論の試み，体育学研究27，pp.239～246
2）江藤真生子・三田沙織（2021）体育授業における障害者スポーツの教材価値に関する検討，琉球大学教職センター紀要３，pp.1～11
3）大越正大（2016）楽しくわかる「体育理論」の実現に向けて，体育科教育第64巻第10号，大修館書店，pp.24～25
4）木村拓樹（2017）小学校体育科におけるゴールボールの教材化の課題と展望，鳴門教育大学学位論文要旨，pp.289～290
5）高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎（1994）体育授業の「形成的評価法」作成の試み－子どもの授業評価に着目して－，体育学研究39，pp.29～37
6）高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖・大友智（2010）体育教育学入門，大修館書店，pp.48～72
7）長谷川悦示・髙橋健夫・薄井孝夫・松本富子（1995）小学校体育授業の形成的授業評価票及び診断基準作成の試み，スポーツ教育学研究14(2)，pp.91～101
8）日野克博・髙橋健夫・平野智之（1997）よい体育授業を実現するための基礎的な条件の追証的研究－小学校体育授業を対象としたプロセス－プロダクト研究を通して－，筑波大学体育科学系紀要20，pp.57～70
9）福ヶ迫善彦・米村耕平・髙橋健夫（2003）体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント，明和出版，pp.40～44
10）文部科学省（2018）中学校学習指導要領解説保健体育編，p.25